

## 第四節 鉄器の使用

文化の発達段階を示す方法の一つに、使用している利器によるものがある。すなわち、石器時代・青銅器時代・鉄器時代などの区分である。この方法によって文化の発達区分をすると、石器時代の次には青銅器時代が、さら

にその次には鉄器時代へと発達するのであるが、わが国では大陸や朝鮮半島の影響を強く受けたため、石器時代の次には、青銅器と鉄器がほとんど同時にたらされた傾向がある。したがって、石器時代から金属器時代へと移行したとみてよい。

本土では、縄文時代までが石器時代、弥生時代以後は金属器時代と区分されているが、沖永良部島の場合はいづれから金属器が、とりわけ鉄器が使用されたのであろうか。この問題は鉄器の出土によって解明されるべきであるが、現在までのところ鉄器の出土例は報告されていない。一方、一説によると、島内での鉄器使用は中世以後であろうとする考え方もある。そこで、鹿児島県本土や南西諸島における鉄器あるいは製鉄関係の遺跡の状況を概観して、沖永良部島における鉄器使用の時期について推察してみたい。

鹿児島県本土では、弥生時代前期に日置郡金峰町の高橋貝塚で鉄器が使用されていたことが確認されている。この鉄器は腐食していたため形状が明らかではないが、わが国でも鉄器使用の最古の部類に属するものとして注目されている。次に、弥生時代中期になると、鹿屋市王

子遺跡で鉄製のやりがんな 鉈やとうす 刀子が発見されたほか、鉄滓てつじ（かなくそ）が出土している。鉄滓の出土はとりわけ重要な意味をもっている。というのは、鉈や刀子などは外部からその製品を移入したとみることもできるが、鉄滓は製鉄によって生じたものであることから、その地で製鉄が行われたことを示しているからである。

また、種子島では、南種子町の広田遺跡から弥生時代後期の鉄製釣針が出土し、西之表市住吉の上能野貝塚かみやまのからも古墳時代の鉄製釣針が出土している。種子島は古くから砂鉄の産地として知られていることなどから、これらの釣針も島内で作られた可能性が大きい。

大島郡内では、笠利町のサウチ遺跡で弥生時代終末期のかじこ 轄口が出土していることが注目される。轄口が出土したことは、この地で鉄器が製作されていたことを示しており、意外に早い時期における製鉄技術の導入がなされていたようである。ついでに沖繩に目を向けると、具志川市の宇堅貝塚群から弥生時代の板状鉄斧が出土している。この遺跡では九州系の土器も発見されていることからすると、この鉄斧も九州地方との接触によってもたらされたとみられるようである。

いずれにしても、弥生時代には南西諸島に鉄器が持ちこまれ、一部ではその製作にまでおよんでいたことが明らかになっている。このようにみえてくると、沖永良部島でも今後の調査によっては鉄器類の出土が予想されよう。それが弥生時代にまでさかのぼるものかどうかは別にしても、古代には鉄器が一部で使用されるようになっていたのではあるまいか。